

学長室だより

2016.12.1 NO.8

アドバイザー・アドバイザーから仲人へー米国での思い出ー

本学では学生の勉学・生活においてときには相談相手となり、ときには指導を行う制度としてアドバイザー・アドバイザー制度がある。学生便覧にも「アカデミック・アドバイザー・システムは、学生のアカデミックな関心を刺激すること、大学が持つ資源を最大限に使用して学業や学生生活における様々なハードルを乗り越えていくために支援することを目標としています」とあり、小規模で少人数の大学で学生と教員の間が非常に近い関係にある本学では重要な制度のひとつである。このアドバイザー・アドバイザー制度は米国の大学では広く定着している。私も米国の大学で教えていたころ、アドバイザーとして学生達の相談や指導に当たったことを思い出す。話はもう40年近く前のことである。私はイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(University of Illinois at Urbana-Champaign)の経営学部で教鞭をとっていた。その時のアドバイザーの中によく勉強をし、成績のよかった男子学生がいた。今でも彼の顔を思い浮かべることが出来るが名前は思い出せない。私のオフィスアワーには特段の問題がなくても気軽に話をしに私の研究室に来るような青年であった。この学生の実家はイリノイ州南部の農家であった。彼は大学を卒業したら更に勉学をつづけて経営学修士(MBA=Master of Business Administration)の学位を取得したいという希望を持っていた。私も、彼の成績ならばMBAに進学できるであろうことや、その場合には推薦状を書くこと等を約束していた。しかし、MBAに進学する場合には職業経験を持っていることが大切で、学部卒業後に直接MBAに進むことはあまりないので、まずは就職すべきことも話した。現在もそうだが、当時のMBAプログラムの授業料は他の専攻分野の授業料よりも高く、彼は授業料捻出のためにまずは働いて貯金しなければならない。このことが彼の悩みであった。日本の大方の学生とは違って、米国の学生、しかも大学院修士課程以上の学生ともなると自分で働いて貯金をし、それでも足りない部分は政府や銀行のローンを組んで授業料を確保することが普通である。ある時、彼が私の研究室に来て相談したいことがあると切り出した。自分はお金もないし未だ職業にもついていないが、学部を卒業したらどうしても即MBAに行きたいので推薦状を書いてくれという依頼であった。その理由は、自分には同学年のガールフレンドがいること、卒業したら二人は結婚することを約束していること、彼のMBA進学を支えるために彼女が働くつもりでいること、生活費を節約するために二人で一緒に出来るだけ切り詰めた生活をする覚悟が出来ており、そのために彼女は彼が進学するMBAプログラムの所在地に一緒に行って仕事を探すつもりであること、等であった。私の研究室で彼と私はかなり長い間話をしたが、結局私は彼の推薦状を書くことを承諾した。そして、おそらく6~7通の推薦状を書いたと思う。いずれも彼の勤勉さと成績のよさと将来性を述べ、彼の生活ぶりを書いて、出来るならば奨学金を与えてほしいことも書き添えた。しかし、実際のところ、彼の希望が叶うか否は確かではなかったのである。だが、それから2カ月くらいたったころ、彼が突然私の研究室に駆け込んできてニューヨーク大学からMBA入学許可が届いた事を報告した。私も彼と共に喜んだ。ニューヨーク大学と言えば米国を代表する私立大学の一つである。ただ、奨学金の供与の願いは叶えられなかった。

授業料は当時のお金で年間2万5千ドルであったと記憶している。ニューヨークで若い二人が生活するには最低でも1万ドルは必要であったろう。合計で年間3万5千ドル、2年間で7万ドルが掛かるということの意味していた。当時の私の年俸は3万ドルくらいであったから、若い二人にとって7万ドルという数字がどのくらい重圧になったかは容易に推測できた。それから彼と彼女が私の研究室に来るようになり、3人でああでもないこうでもないという数字を挙げては議論したことを覚えている。彼女もイリノイ州の田舎の出なのだが、ニューヨークに行けば働き口があるので自分は働くというのであった。私はその時、こういう想いを持っているアメリカ女性もいることを強く思って感動したことを覚えている。そうこうしているうちにニューヨーク大学で新学期が始まる時期も迫ってきた。しかし、彼らはニューヨークに出発する前にやらなければならないことがもう一つあった。それは彼らの結婚式である。40年も前のことなのだがイリノイ州の田舎では未だ古き良き時代のコミュニティ社会が残っていて、そこでの農家の男の子としては結婚の披露をしなければならないというのである。結婚式は村の教会で挙げるのだが、その場合証人が必要である。彼等は私にその証人になってほしいというのであった。というのも、二人のこれまでの経緯を知っているのは私ひとりであったからである。私はその願いを受け入れた。ある初秋の夕方、彼の村の教会で結婚式が執り行われた。私はそれがどんな結婚式であったか覚えていない。私が覚えているのは式後のパーティである。それはピーター・ブリューゲルの「農民の婚宴」の絵にあるような典型的な田舎の宴会であった。みんなが集まり二人を祝福し大盛りの料理を食べながらワインを飲むのであった。二人が腕を組みながら会衆の中を歩いて挨拶をする。この光景などは日本の結婚式でもよく見られるものだが、違いは、そのパーティが行われていたのは農家の家と庭にいっぱい飾りキャンドルを付け、皆が大声で話をし、私にはわからない地方の方言やギャグ等が盛んに飛び交い、ワインで乾杯する大騒ぎであったことである。私も酔い半分で証人としてのお祝いを述べた。会衆は見知らぬ東洋人顔の若い大学教員が挨拶すること等予想もしていなかったのであろう。一瞬の間静かになったように思われたが、それも再び騒音と笑い声にかき消されていった。私は、宴半ばで30マイル離れたアーバナ市の自宅に戻らなければならないことを気にしていた。新婚の二人に改めてお祝いの言葉をかけ、挨拶をして宴会の場を出たのはかなり夜も遅くになっていた。私は、背の高いトウモロコシ畑が両側に延々と続く夜の田舎道を帰ったことを今でも鮮明に覚えている。もう40年も前の米国でのひとこまで、若かった二人も今では60歳半ばになっているであろう。



鈴木 典比古